

アメリカ大陸、満喫ドライブ

TELMENA SCENIC BYWAY の巻

「アーカンソー」を乾燥した感想は。

2006年 4月13日～16日

大分暖かくなり、昨年、アメリカの大地を好き放題ドライブし、そのたびに新しい発見があり、自分では随分とアメリカ通になったつもりでいました。でも、冬の間は、雪もありますので、自重とおとなしくしていたのですが、そろそろ啓蟄もすぎ、やはり、その虫がおきだしたというわけで、今回、もう一度、ネブラスカから南の方を回ることになりました。

ネブラスカからカンザスへ(初日)

ネブラスカの大地はまだ、やっと冬が開けたという感じで、周りの野原の草はまだ枯草の黄色が主体ですが、さすが、カンザスはもう、春たけなわといったところでしょうか、畑には蓮華の花が咲き乱れている。その紫の絨毯が敷き詰められて畑を見ながら、いつもは南から北に向かう 77 号線を快適に飛ばす。久しぶりの高速ですので、ついついスピードが出てしまう。カンザスに入り、最初のみどころ、Tuttle Creek に立ち寄り。Tuttle という単語が、辞書をいくら調べても載っていない。Turtle ならカメだし、tattle ならキアシシギと辞書にある。最初は、カメでも住むような小さな沼地ぐらいかと想像した。地図では、川がほんの少し広がった程度でしか紹介されていない。ところが、実際に行ってみるとこれが、なんとまあ、日本ならもう立派な湖という広さ。どうも、カメがいるような小さな池どころではない。というわけで、これは、渡り鳥の鵜が飛来することから着たのではないかと思い直した次第。あるいは、インディアンの言葉でなにか別の意味があるのかもしれない。こんな調子であるから、旅での新しい発見には興味は尽きない。

Manhattan という、カンザス大学の分校がある大きな町を過ぎ、ここからは 77 号線を



別れ、快調にただ真っ直ぐに南に伸びる 177 号線に向かう。両側は何の変哲もない農村地帯だが、暫くするとずっと向こうのほうに、ものすごい煙が立ち昇っている。西部劇なら、さしずめ、よそ者が近づいてくるというインディアンの狼

煙というところか。やがて、周りの枯れ草の丘が真っ黒になっているのに気づいた。焼畑ならず、枯れ草を燃やしているのである。ただ、燃やすといっても、その広さが違う。一山、ふた山どころか、延々と何十マイルも続く丘、見渡



黒く焼かれた草原。「アッ。まだ火だ」

す限り、これを焼き尽くしてしまうのである。こうして、新しい元気な草の芽がでてくるのであろうが、ここまでやる、その豪快さには頭が下がる。先日、テキサスのほうで、草原に火がつき、手が付けられなくなり、人家まで燃やしてしまうという事故があったが、風の強いときにこれほどの広さのところに火がついたら、それこそお手上げになるのは目に見えている。途中、道路のすぐ脇に、大きな木の根元にまだ炎の燃え上がっていたところがあった。証

拠にと、車を止めて窓を開けて写真を撮ろうとしたら、その途端に、あの焦げた臭いとともに、ムーンという熱気で顔がほてる始末。あーっ、恐ろしい。

70号線から、南、Council Grove を抜けて、Strong City、そして、有料の高速の35号線と交差するあたりまでは、Tall Grass の丘が延々50マイルくらい続いている。そのなかをほとんどハンドルを切ることもないドライブが続く。目的のカンザスのエルドラドまではあと僅か。ところが、ここで、ひと悶着。この高速と交差するあたりで、177号に行くつもりが、なんと、カジノへの誘導道路に入ってしまった。とにかく、こちらはカジノが市民の娯楽の一つ。立派な行楽地になっている。その入り口の道も立派なので、てっきり、これが高速かと思い込んでしまった。おまけに、「Welcome Kansas」とまでついている。ここまで歓迎してくれているのかといい気分になって、暫く走っていたら、どうも様子がおかしい。そのうち、行き止まり。ここで、間違いに気づき、元の道に戻ればよかったが、「何とかなるさ」の気持ちで、そのまま進むと、直ぐに高速にでた。「方角はこちら」と思い込みもはなはだしく、西に進んだつもりが、実際は北、つまり、来た方向に逆戻りをしてた。これも、なんとなく間違いに気づくという幸運があり、今度は、おとなしく引き返し、現状復帰。間違っって入ったカジノの入れ口までもう一度もどり、その直ぐ横にある、目的の177号線にはいる。この日は、時間的に余裕があったので、こんなハプニングもなんとなく乗り切ることができ、やがてこの日の宿泊地、エルドラドに到着。勿論、こここのエルドラドは、数多くある同じ名前の町のほんのひとつの町である。黄金の国という意味のこの名前が、どこからついたのか、そんなヒントがどこにあるのかなと思いながら宿に入る。宿は、インターネットで予約した格安のモーター。快適とは行かないが、ドライブ目

的の1人旅は、寝床があれば十分というわけで、一泊、40ドルの部屋に泊まる。このエルドラドばかりでなく、今回のドライブでは、至るところで強風が吹きまくっていた。考えてみれば、このあたりトルネードのよく発生するところとか。地形的にもそうなのか、あるいは、ひとたび風が吹けば、それをさえぎるものがないので、幾らでも風が吹きまくり、一年中風のやむ時がないということかもしれない。

エルドラドからオクラホマ・マイアミまで。(二日目)

いよいよ、今回のドライブも本番に入った。エルドラドから、今度は東に一気に進み、ミズーリの州境に近い、インディアンの部族の名前でもあるチェロキーという町に向かう。400号線はとにかく真っ直ぐ東に走っている。反対向きは州都ウィチタに向かう車がそこそこあるが、東に向かう車はほとんどない。前後2・3マイルは車がない。ちょっと寂しい気もするが、気楽なドライブが楽しめる。やはり、高速道路の両脇はただ、ただ広い草原が広がっている。チェロキーの近くに、「Big Brutus」という案内板を見つけた。よほど、大きな何かがあるのだろうと想像し、これも好奇心がさせるわざ。わざわざわき道にはいり、これを見に行く。なるほどと思ったのは、「Big Brutus」まで、あとすこしというところまで来たとき、突然、遠くのほうにこれまたどでかい、クレーンのようなものが姿を現した。なるほど、これか、と直ぐに納得。近づいてみて、これまた驚き。なんと、その機械の正体は、ショベルカー。これが、草原の真っ只中に鎮座しているのである。説明によれば、このあたり、露天掘りの炭鉱があったとのこと。その掘削のために大活躍をしたのが、このショベルカーだそうで、その大きさ、150フィート(45M)、重さは、実に4000トンとのこと。10階建てのビルくらいあるのではなかろうか。これで、石炭をがむしゃらに掘りまくったのであろう。こんな機械を平気で作ってしまうのであるから、アメリカの技術力は大したものだとつくづく思う。これを設計した技術屋の心意気に脱帽というところ。そんなアメリカ人に脱帽したところで、やがて、ドライブはオクラホマに入る。ここ



これが、Big Brutus。

に、フロリダではないが、マイアミという町がある。なにがマイアミかは知らないが、ここは、もうオクラホマに間違いない。このあたりはのシーニックドライブウェイは、湖のよこの木立のなかを突き抜けるという緑溢れるコースである。ネブラスカと比べるとやや道路がアップダウンしており、すこし、高地に来た感じ。

なれない土地であるから、道路の案内板や町に入る前の歓迎のボードには食い入るようにして目を見張る。

そんなときに、川の名前が、「イリノイ川」となっているのを見つけた。「アレーっ。ここは、オクラホマ。イリノイの川はもっとずっと東のはずだが」。いくら何でも、そのイリノイ川がここまで曲がりくねっていることはないだろう。とにかく、アメリカの分水嶺は、ロッキーとアパラチアのはず。そして、その真ん中にミシシッピー川があり、それより西のある川はすべて東に流れて、これに合流しているはず。イリノイ川は、ミシシッピーの東にある川ではないか。と不思議に思ったが、考え事はしてられない。あとで調べることにした。地図でみれば、確かにここは「イリノイ」川とでている。今度は、なんで「イリノイ」なのかということになる。やはり、とおもったのは、このイリノイとはインディアンの言葉で、「男ども」という意味。なるほど、インディアンが活躍した場所だけに、あるところでは、州の名前になり、別のところでは、川の名前になっているというわけか。イリノイ川がひとつだけでないというのも、いかにももとインディアンの国ということに納得したしだい。

TALIMENA SCENIC DRIVEWAY(三日目)

途中、チェロキーの博物館というところによるつもりで、これを探しあて、入り口までたどり着いたら、この日、グッド・フライデーということで、こうした博物館は全てお休み。門前払いをくい、断念して、いよいよ今回のドライブのお目当てのひとつ、タリメナシーニックドライブに向かう。オクラホマとアーカンサスのわたるドライブコースで、周りはナショナルフォレストになっている。この名前の由良が気になりインターネットで調べていたら、こんな紹介があった。なるほど、英語の辞書をいくら調べてもわからないはず。The Talimena Scenic Byway travels along the top of Rich Mountain and cuts across a corner of Queen Wilhelmina State Park. It is the only scenic drive located in Mid-America. This fifty-four miles road stretches from Talihina, Oklahoma to Mena, Arkansas. Its name comes from the combination of both towns. There are visitor centers located at the beginning and end of the byway. There are more than two dozen historical sights and overlooks along Talimena Drive. というわけでした。まさに森林の中のドライブ。ネブラスカでは見られない緑溢れる景色を楽しみながら暫くの登りを過ぎると尾根に達する。ドライブコースのこの尾根つたいに自然



Talimena Scenic Driveway パンフレットから

のままの起伏とカーブがそのままの状態が道路が作られており、右に左にとハンドルを切るのは、いかにもドライブをしているという気になる。とにかく、前後に車はいないし、スピードはどれだけ出しても、オーバーランさえしなければ、好き勝手という状態。ネブラスカやカンザスではとても味わえない運転の醍醐味である。そこここに展望台がある。右の展望台からは、南に広がる大盆地が見渡せる。左は左でこれもまた盆地が広がっている。つまりここは、どちらを見ても、素晴らしい展望が開けているというわけ。こんなところを自動車レーサーの気分で行くとカーブを切りながら運転を楽しみ、ご満悦で、写真を撮る。ところが、ここで、とんだ計算違い。普通の道路なら難なく時速 60 マイルでの行程で、時間を計算できるのだが、ここは、そうはいかない。いい気分、すでに満開になっているつつじの写真など撮って山を下ったのが、すでに 5 時過ぎ。宿は、予約はしてあるので問題はないと高をくくり、漸く、インターステーツの I-30 へのジャンクションのあるアルカデルフィアに着いたのが、午後 8 時。回りははや夜の帳が居り始めている。



さすが、オクラホマ。すでにつつじが満開

ここで、ホテルに遅れる旨、連絡。この日の宿は、リトル・ロックという、アーカンソーの州都の町。そこまで、真っ黒なインターステーツを飛ばす。高速道路でも、こちらはジャンクションとジャンクションの間には街灯がほとんどない。だから暗くなると、虫が車のライトをめぐめて飛んでくる。これがフロントガラスに当たってつぶれ、窓は油だらけ。スピードが上がっていると、すこし大きな虫になると、その衝撃もなかなか。時には窓ガラスが割れるので

はと思われるくらい、「ビシッ。」大きな音がする。なれない夜の高速の運転は、なかなか疲れるが、自分がどのあたりを走っているのかは、こちらは、ジャンクションにそれぞれ番号がついていて、これが、州境からの距離になっているので、この番号さえ覚えておれば、出口で町の名前は分からなくても、番号で間違いなく外に出られるということになっている。この日の宿は、リトル・ロックの郊外で、I-30 から、430 号に入り、さらに 630 との交差をするところ。ここで、高速からおりて、すぐに宿を見つけられるとたかをくくっていた。ところが、ところがである。すぐに見つけられると思ったホテルに辿り着く前に、まず、この出口が、ぐるぐる回るジャンクションで、ここを出るときには、自分がどちらに向かってはしっているのか分からなくなってしまった。それに、この町、やたらと道路が交差していて、信号が次々に出てくる。アメリカの町なら碁盤目になっていて、直ぐに通りの名前が見つかるはずなのに、この町の、この辺り、町外れで、道路は曲がって

いる。標識は暗くて読めない。そんなわけで、すぐに道に迷ってしまった。これは何とかしなければと、夕飯を買うつもりでアービーというコンビニに入る。が、ここが、また、この日は大賑わい。大繁盛である。それでも、店員にホテルの場所を聞いたら、丁寧に教えてくれ、注文の料理をもらい、言われたとおりに道路に出たが、これがまた、曲がりくねったところで、直ぐに、また、迷ってしまう。元に戻るわけにもいかず、ぐるぐる街角を曲がり、別のファーストフードの店に入る。が、ここはお客がほとんどいないし、店員もなかなか出てこず、結局、道が確認できず、仕方なく、パーキングにいた若い数人のグループにホテルを訪ねる。ところが、彼らにはどうも通りの名前が分からないらしい。運のいいことに、1人の娘さんが、私が知っているという。丁寧に教えてくれたのだが、肝心の幾つ目の信号を曲がるかというのが不確だったようだ。結局、この案内も、結果的には、間違った通りに入る。とにかく、知らない町で、通りの名前がよく分からず、これは、たいへんなことになったと少し慌ててきた。すでに、町に入ってから、1時間近く、ぐるぐる回っている状態。ここで、ホテルにもう一度遅れると電話をいれる。町には、歩いている人はいないので、道を聞くには、どこかの店か、ガソリンスタンドに入るしかない。と、その時、おなじホテルでも、少し格の高い、ベスト・ウェスタンというホテルが見つかった。ここは、格好をつけている場合ではない。恥を覚悟で、ここに入り、ボーイにライバルの安ホテルの場所を聞く。さすが、同業者仲間。すぐに詳しい道を教えてくれた。こちらは、それでも心配。地図をくれと頼み、それに、道順を書き込む。なれたところであれば、これで十分なのだが、よそ者には、それでも不十分。おまけに言葉も不十分。このボーイ。本当にわかっているのかと、「じゃ、言われたとおりに、もう一度言ってみろ」という。しっかりしている。言われたとおりに復唱をして、よし合格とまではよかった。が、ここでも、肝心なのは、ホテルのパーキングから出たところの角が一つ余分だったということに気がつかなかった。信号の数だけで教えてくれたのに、この出口まで数えてしまったので、たちまち、また道が分からなくなる。そんなわけで、この時も、また、住宅街に入り込んでしまい、だんだん、やけっぱちになってきた。このまま、見つからなければ、野宿か、すこし居直りの気分も出てきた。そんな状態ではあったが、それでも、何とかホテルに着かなければ、今後のためにならないと、もう一度、挑戦することにした。すでに時間は11時近くになっている。こうして、何とか別のガソリンスタンドに入り、そこに居た若い女の店員に道を聞く。が、その店員は知らないという。たまたま、店に来ていた店員の知人が、今度は、丁寧に、外にでて道を教えてくれた。この時には、先ほどのホテルでもらったこの周辺の地図を持っていたので、これで、自分がどこにいるのか、どのあたりを迷ってドライブしてきたのか、を教えてくれた。なるほど、とへんな納得をして、もう一度、今度こそと意気込み、さっき通ったばかりの道を今度は逆に進む。自分では信じられないような方角ではあるが、言われたとおりに進み、まさに正解。やっと、ホテルのマールを見つけた。すでに時計は11時17分。よくもまあ、これだけ長い間うろちよろしたものだと思ってもあきれて、やっとの思いでホテルに。この安堵感と、疲れで、この日

はただ寝るだけ。いろいろ反省点もあったが、それは、また、この次ということで。お休み。

この日の反省

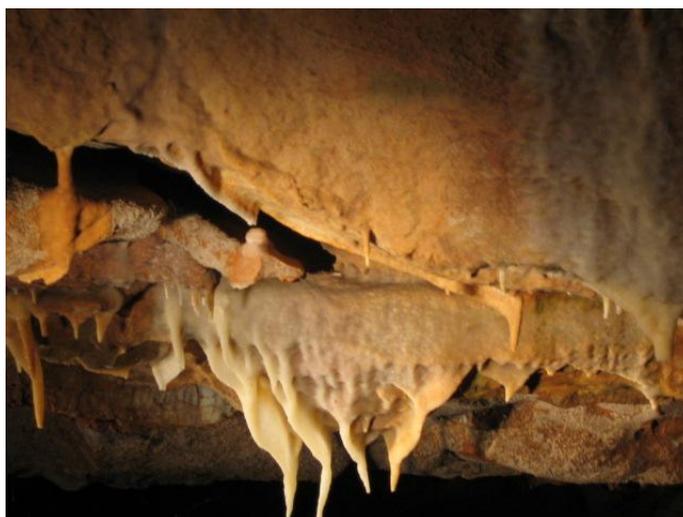
とにかく、山道ドライブは予定より時間が掛かる。
知らない土地での場所探し、取り分け、大きな都市では、詳しい地図が必要。
町の名前、通りの名前はしっかりと頭に入れておく。
方角が分からなくなったら、車を止めて確認。

というところでしょうか。

こんな苦労も旅の楽しみの一つ、というのは、負け惜しみ。

SCENIC 7 BYWAY Mystic Caverns あたり

昨日は予想外の苦戦。このため、朝予定の時間に起きられず、ついつい寝坊。出発が30分遅れた。悪いときには悪いことが重なるもの。昨日の二の舞はせずと、よくよくモーターで道を尋ねて、いざ出発となったが、これがまた、半分寝ぼけていたためか、曲がる交差点を間違え、気づくと乗るべきジャンクションと反対方向に走っていた。リトル・ロックのセンター街である、大学通りが見えてきた。ここで、漸く自分のいる位置が分かり、慌てて引き返す。そし



Mystic Caverns

て、高速に乗ったのはよいが、ここがまた厄介なところで、高速430と630が交差しているところ。自分ではどこで間違えたのかわからなかったが、430を北に向かうはずが、630を東に向かって走っているではないか。この高速、リトル・ロックの町なかを二分する形で走っている。走行しているうちにキャピタルシティーではおなじみの立派な州の庁舎が見えてきた。一見、ホワイトハウス風のもので、なかなかの見栄え。まあ、これを見て、少し気がおさまったと、いいたいところだが、その先がいけない。ここは、丁度、インターステーツの30と40が合流するところ。ここで、また、間違えて、30を西に入ってしまった。本当は、40を西に行かなくてはいいけないが、そのためには、もう一つ高速を東にい

かないといけない。こうなると頭のなかが混乱状態。仕方なく、また、もう一度、リトル・ロックの町を今度は、南の半分をぐるっと回る形で周回する。本当は、北西に行きたいのに、無理やり、南の端を走っていたのである。結局、こんなことで、リトル・ロックをでたのが、8時すぎ。予定より1時間のロスである。また、また、気が焦る。



まるで、ジェットコースター

形で走っている山岳ドライブウェイである。途中には、鍾乳洞などもあり、ここに立ち寄る予定。道は緩やかな登り坂だが、やがて、尾根道になる。すると道路の両脇は、大盆地を見下ろす形だ。そこここに見晴台があり、右の景色も左の景色も楽しむことができる。ここから見ると地平線のかなたまで、丘陵地帯が続いている。どこまで行っても変わらぬ景色がいかにもアメリカの大きさを感じさせてくれる。緑豊かな、盆地を見下ろすところに、「アーカンソーのグランド・キャニオン」と案内がでていた。なるほど、そういわれてみれば、この景観は、あのグランド・キャニオンと良く似ている。ただ、ここには緑がある。豊かな森林がある。グランド・キャニオンは、尾根ではなく、平地の下に溪谷が削られていたのだが。景色を堪能したあと、このあたりに良くあるケーブに入る。Mystic Caverns という鍾乳洞だ。アメリカには、あちこちに沢山の鍾乳洞があり、案内によれば、そうしたケーブの名所が御互いに連絡しあって、国中の鍾乳洞を尋ね歩けるようにパンフレットを出している。そのパンフレットによれば、鍾乳洞には、沢山の科学があり、歴史があり、子どもたちの野外学習にはもってこいの場ということらしい。どこの鍾乳洞にも、学術研究員をおいて、専門的なガイドをすることを自慢していた。もともと、こうした鍾乳洞のようなものを見に来るひとは、少し変わり者か、好奇心の旺盛な人たちということ前提にしているらしい。ここも、ケーブの規模はさして大きくはないが、若い、まだ、大学生ぐらいのお兄ちゃんがいる、ケーブの中を案内してくれる。英語の解説で、よく分からなかったが、仕切りに、ケーブの出来かた、この岩の質、そして、こうしたケーブの維持の仕方などについて説明していた。いろいろな形の結晶化してできた岩には、それぞ

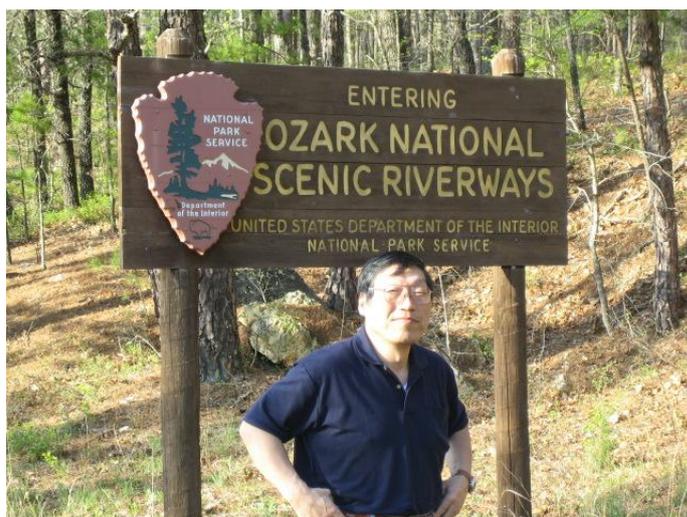
それでも気をとりなおし、高速を北西へと飛ばす。ラッセルビルというところで、今度は真っ直ぐ北に向かう7号線に入る。この道は、アーカンソーの南にあるエルドラドの街、実は、このエルドラドはかなり大きな街でよく知られているところ、ここから、真っ直ぐ縦断する形で走って、ミズーリまで続いているドライブウェイで、その景色がよいところから、Scenic 7 Byway と呼ばれている。

Ozark National Forest を縦断する

れ独特の名前がついていて、これが一つのストーリーをつくっているらしい。一緒に、ツアーで回って家族の子どもたちも非常に熱心に、この説明を聞いていた。こうしたガイドのあとには、「質問は?」と来るが、アメリカ人は、このときに非常によく質問をする。また、子どもたちも、臆せず、自分の疑問や不思議に思ったことをはきはきと質問している。物怖じしないところがいかにもアメリカ人らしい。この日も、天上のツララ状のものや、床にできた柱とは違って、平らな縞模様の形が幾つかできていた。これを見つけた小さな子供が「なぜ他のものとは違ったでき方をしているのか」と、質問していた・・・と思うが、なかなか鋭い質問である。こうして、親のほうも熱心に、自然の造詣を見ながら、自然の偉大さ、その歴史の深さ、それに加えて、科学的、化学的なことまで、勉強できるこうした野外活動をするのであるから、アメリカの学校の夏休みが非常に長くても、子どもの教育という意味では決して、悪いことではないと思った次第。

MARK TWAIN NATIONAL FOREST

アーカンソー州の北西部は、山々に囲まれた中をホワイト川、アーカンサス川が流れて



おり、緑の森林と、綺麗な川の流
れがあり、変化にとんだ自然豊か
なところ。この水が豊富なことが、
山のあちこちに鍾乳洞を作ってい
る。この辺り、一体を **Ozark
National Forest** とよび、リゾート
地として、州内ばかりでなく、州
の外からも旅行者が耐えないとこ
ろである。この森の地帯を抜け、
ミズーリへの入り口に **Mammoth
Springs** という町がある。とても

Ozark National Scenic Riverways の看板の前で

大きな泉があり、そこが、ビジター
センターになっている。予定より、

二時間ほど遅れての到着であった。昨日のモーテル探しの苦勞もあり、できるだけ明るいうちに今日の宿泊地の **St. Charls** にたどり着きたいと、途中、コースを変えて、高速に乗ることを考えたが、それでも、到着するのは、8時過ぎになりそう。それなら、少々遅くなくても同じことと、また、気を取り直し、予定のコースをたどることにした。ミズーリ州のこの辺りも、**MARK TWAIN NATIONAL FOREST** という名前のついた森林地帯、(ご存知のように、あの英語の教科書に出てくる冒険小説の作家、マーク・トウエンである。あとで、ミシシッピー川のほとりにある彼の生まれた町ハンニバルというところを訪ねる予定になっていた。)で、多分、いくつか山越えをしなくてはならないだろうと覚悟。幾分のあせりはあったが安全運転を心がけ **60mile** を守る。といっても **100** キロ近くのスピード

で走る。しばらくすると山道に入る。この辺りもアーカンソーと同じようなシーニックドライブウェイで、いたって景色がよい。さながらレーサー気分が快調な走りだ。が、しかし、しかしである。いつの頃か、山道が次第に激しいアップアンドダウンとなる。これまでもリンカーンの街中でさえ、結構道路の上り、下りがあり、アメリカの道路は坂道が多いのには驚いていた。とにかく、こちらは地盤が固いので、大地を削るのがたいへんなのだろうと推察し、また、雨が降ったり、雪が融けてもすぐに水が側溝に流れ込むことができるようになっているなどと感心をしていたのだが、ここの上り下りは中途半端ではない。100メートルから200メートルくらいをくだり、そのあと、急に上り坂。同じくらい行くと、また下り坂。ちょうど、皴のよった絨毯を思い浮かべてもらいたい。そんなところを走るのは、まるで太平洋のなかで大きな波の山を越えていく感じ。下りでは、70マイルくらいまでスピードがでてしまう。これが一気に上りになるとズズーッと重力がかかるのがわかる。そして、坂の頂上辺りでフワッと、空中に飛び出すような気分。その向こうは何も見えない。車が来る可能性もあるが、そこは度胸を決めて、次の坂に飛び込んでいく。道はまっすぐにできているから、相手もセンターラインを超えていないことを前提にしている。たまにすれ違いの車がやはり同じような形で急に顔を出すこともあるので、ヒヤリとすることもあるが、気にしだしたらきりがない。それよりも次にどんな坂が待ち構えているかを想像しているほうが楽しい。この繰り返しである。まさに、ジェットコースターの一番前に乗っている状態。車に弱い人は、それまでの右に左の急カーブの連続もかなわぬだろうが、この上下のゆれの厳しさにも思わず悲鳴をあげてしまうだろう。とにかくアメリカの道路づくりは、自然の形そのままに道路を作るということに徹しているようだ。尾根が曲がっていれば、そのように曲げ、起伏のあるところは、そのように起伏をそのままつけて、まっすぐにしたり、平らにしたりはしない。それに、こうした山道でも、ガードレールはほとんどない。道が広いこともあるが、ガードレールを作っても、事故は自己責任だから意味がないということだろう。自分のことは自分で守る。それがこちらの常識なのだ。こんな調子で、度肝を抜かれて、山道ドライブを楽しむ。かなり時間はかかったが、時間のたつのがわからないくらいのスリルと興味に溢れたドライブであった。

こうして、**St.Charls**に向かう高速のインターがあるキューバという町、もちろん、町の名前がこれである、についたのは、すでに、夕陽も落ち始めた頃。今度は、インターに乗る前に、宿の場所をじっくりと調べ、町の通りの曲がる回数もキチンとシミュレーションをして、無事に着くことを祈りつつ、インターに入る。今日もすっかり暗くなったが、I-44を約1時間。久し振りの真っ直ぐな道路で、ついスピードが出る。ここに来て、パトカーに捕まってはなんにもならない。まあ、慌てずのんびりゆこう。頭のなかにしっかりとコースを叩き込んでおいた成果か、この日の宿はすぐに見つかった。ふと見た角にモーターシックスのあの6の字のネオンが目に入った。なんとラッキー。予め買い込んだ夕食と、冷えたビールで喉を潤し、いい気分がベッドにつく。

念願の St. Charls の町 （ 四日目 ）

いよいよ、今回のドライブの最終日。この日はミシシッピの川沿いに北上し、アイオワまで行くつもり。St.Charls は、ジェファーソン大統領の命を受けた探検隊「Lewis & Clark」が、ここからミズーリ川を遡って旅をした出発点。その当時から交易の盛んな町として栄え、インディアンとアメリカ人との交流の場でもあったようだ。しかし、今回は、ミズーリ川ではなく、ミシシッピ川の方をドライブする。かつて栄えた町の名残がオールドタウンとして残っている。ここをすこしゆっくりと車のなかから散策する。どこもそうであるが、立派な教会、そして、かつては船乗りや荒くれ者たちでにぎわった盛り場らしき町なみを写真に納める。こうした通りは決して大きくはないが、窓に装飾が一杯されたレンガ造りの店がずらりとならび、店の前には、カフェテラスがあつたりして、とても優雅な雰囲気だ。ここから、ミシシッピ川の運んだ土でできた平野の中を突っ走る。暫くして、ふとミシシッピの川岸の町についた。地地図では、クラークスビルと言う名前が載っていたが、ここに大きなダムがある。このあたりのミシシッピの水量はかなり多くて、川幅も 200 メートルくらいあるのではないか。その水面を、これまた、どでかい運搬船が川を遡っている。墨田川で見るように船の横に三隻つなぎ、縦には十隻くらいつないだ長さだ。この船がまるで軍艦のように、かなりの速さで逆のぼっていく。インディアナでは、オハイオ川を、石炭を満載したこうした船を見たが、さて、このあたりでは一体なにを運んでいるのであろうか。とにかく、この広いアメリカでの水上輸送は非常に重要なようで、Lewis と Clark も、ロッキーを越えて、ミズーリ川とコロンビア川を結ぶ水系の交通路を探すのが一つの目的だった。アメリカの内陸の産物である穀物、トウモロコシ、などを大量に運ぶのは、この川に頼るしかないようである。このあたりから、水辺の道を走ったり、時々丘の上になる道になっていて、そうしたところには、必ずといっていいほど、見晴台が整備されていた。

驚いたことに、ふとウェルカムの看板をみると、ルイジアナと書かれた町があつた。なんと、ミズーリにルイジアナがあるとは。しかし、これも、かつてアメリカがこのミシシッピ川から西の地域をナポレオンから買収したときには、ここは全て、ルイジアナと呼ばれていた地域、だから、ここにルイジアナという町があつ



ハックル・ベリーの像か

でも決して不思議できない。それよりも、この町、とてもこぢんまりとした町であったが、対岸のイリノイに渡る橋もあるほどの交通の要衝であった。それで、この町の名前にも納得。ここから上流に向かって、暫くいくと、ハンニバルという町につく。ここがマーク・トローウェンのすんでいたところらしい。少年時代をすごした家と博物館があるようであったが、時間の余裕がなくパスする。その代わり、町かどで見つけた彼の作品のなかから、多分「ハックル・ベリーの冒険」の主人公達のものと思われるが、銅像が建っていたので、この前で記念撮影と相成った。彼の名前は、ナショナル・フォレストに残るくらいだから、よほどアメリカ人には人気のある作家のようだ。ミズーリとアイオアの州境は、じつは、イリノイとの州境にもなっている。少し入り組んではいるが、ここで、ミシシッピー川に、アイオアの真ん中を流れているデモイネ川と合流している。橋を渡れば、イリノイのハミルトンという町。こうして、アイオアの東の端まで来た。さあ、いよいよこれから、リンカーンまで続いている 2 号線を、とにかく、西に、西にと走って、アイオアを横断するのだ。距離にして約 250 マイル。東京から名古屋くらいの距離かもしれない。カーブのほとんどない畑のなかを突っ切って進んでいる。アーカンソーやミズーリの山なみのドライブでは予想以上の時間が掛かったが、ここは、ただひたすら、制限速度を 5 マイルオーバーの一定速度で走ればよいのだ。このころ、どうも北の方の雲行きが非常に怪しくなっていた。なのに、西のネブラスカのほうには青空が見えている。これなら心配ないと思っていたのだが、とんでもない。途中から、北の雲が南下してきて、急に雲行きが怪しくなってきた。かと思っているうちに大粒の雨となった。一時は、あまりのひどさに車のフロントガラスがなにも見えなくなってしまった。スピードを落とし、センターラインだけを越えないように注意をして、前を覗き込むような格好で暫く運転する。しかし、それも、たちまち、雨はあがり、晴れとまでは行かないが、直ぐにまた、もとの天気になった。まあ、長い間のドライブで随分埃だらけになっていたもので、これで少し車も綺麗になるかなとささやかな期待。聞けば、この日アイオアは大荒れの天気ですトルネードが発生していたとか。見上げると空の一部だけが真っ暗になり、どんよりとした雲が地表まで垂れ下がっている。



Bloomfield の Courthouse



Clarinda の Courthouse

あの雲行きの怪しさを考えたら、やはりと思ったが、それよりも、ネブラスカのしかも、今回のドライブで最初の日に通過したビアトリスの近くにもトルネードが走ったというから驚きである。

2号線は、インターステーツと違い、畑の中を走っている道。こうした道はだいたい二十マイルくらいごとに小さな町がある。古い町には、どこも町も中心に立派なコートハウスがあり、その周りがロータリーになっている。行き当たりばったりのドライブで、必ずそういう建物があるとは限らないが、たまたま、そんな町に出くわすと、やはり、ここにもあったのかとついついうれしくなる。今回も、そんな町に立ち寄って何枚か写真を撮ってきたが、驚いたことに、そのコートハウスが瓜二つ、そっくりという町が見つかった。同じような目的で作ってもものだから、似ていてもおかしくないが、でも、**Bloomfield** という町と、**Clarinda** の町のものは、それにしても良く似ていて楽しくなってしまった。二つの町の距離は、200マイルくらいあるから、おいそれと同時にふたつも作るというわけにはいかないだろう。どちらかのほうが真似をしたのかもしれないが、こんなところにも、アメリカ人の粋な心意気を感じず。そんな、気持ちを楽しんだ **Clarinda** の町かどで、なんと、**Glenn Miller** 誕生の家という看板を見つけた。有名なオーケストラの指揮者。大好きな「恋は水色」のメロディーがついつい、鼻歌となる。生まれたところは、たいしたところではないが、かれの業績は世界レベルだから、この町も鼻が高い。アイオアの片田舎でのとんだ掘り出しものであった。

こうして、久しぶりのアーカンソーを訪ねるドライブも、天気はまずまず。ドライブは、最高。そして、今回もまた、アメリカの大自然を存分に満喫といったところ。こうして、無事、南の地方を巡るたびも終了となった。

「アーカンソーを完走した感想はどうでしたか？」

「あーっ。乾燥しとったよ。」

「じゃー、ミズーリはどうでしたか？」

「うん、さすが沢山の水売り、居たよ」

「アイオアは？」

「あい。終り」

この駄洒落で完結。

